

探訪 チャレンジ企業 23

高い技術力で循環型企業に挑戦 オカダ合金株式会社：宇ノ気町



百年後の国宝 (金沢城址の復元)

このたび、第十三回全国都市緑化フェアの開催を記念して、金沢城址公園に五十間長家、菱櫓、橋爪門続櫓が百数十年ぶりに復元された。百年後の国宝とも言われる雄姿を象徴するものが、加賀藩独特の鉛瓦であり、精密鑄造で評価の高いオカダ合金株式会社が製造を担当し、工事完成に貢献した。

もともとの鉛瓦は、薄板を叩き出して作られていた。しかし、叩き出し品は、角部が薄くなつて、亀裂が入りやすい。復元に際して、耐久性を高めるために、巴瓦、鬼瓦、唐草模様瓦等、角部の多い細工瓦は、鑄造によって製作されることになった。そして、アルミニウム鑄造について高い技術力を評価されている当社に白羽の矢が立てられたのである。

融点の低い鉛の性質をよく見極めて、精巧な鑄鉄製の金型とマッチさせ、一・八〜二ミリという薄い鑄物を作り出すには、工夫に次ぐ工夫、努力に次ぐ努力が必要であったがともかくも、納期内に完成させたことにより、金沢城址復元工事は、滞りなく終了したのである。

創業の経緯(伯父の教訓)

今日では、このように高度な技術力を誇る当社も、実は「ひよんな切っ掛け」から誕生した。現会長岡田欣一氏がまだ学生

だった頃、伯父に「将来、事業を起こしたいがどの業種がよいか」と尋ねた。伯父は「モノを作るならば、たとえ失敗しても材料費だけは回収できる鉛屋か鑄物屋がよい」と言われた。岡田氏はその教えに従って鉛屋で修業し、まもなく開業へとこぎつけたが、肺を患って断念。その後、銀行員へと転身した。

しかし、創業の夢忘れ難く、昭和三十七年、金沢市の自宅裏に小さな工場を建てて、鑄物の製造を開始した。これが、当社の創業である。伯父の教訓を忠実に守ったが故に、オカダ合金(株)が生まれたということになるが、それにして「鉛屋」と「鑄物屋」という取り合わせはおもしろい。その後、会社は順調な発展を続け、昭和五十年には、工場拡張と公害対策を兼ねて現在地に移転したのである。

技術力の重視

当社発展の原動力は、まず第一に金型設計製作からアルミ鑄造、機械加工にまで至る一貫生



「難しいことをやる」「難しいモノを作る」方針が成功の原動力と語る
会長 岡田欣一氏(左)と社長 石丸義雄氏(右)



リサイクル材を利用して作られるミニチュア瓦

産体制を築き上げたことにあつた。特に品質の要である金型を正確迅速に仕上げる技術を習得したことは大きな強みとなつた。

また、「市場のスキマ」とも称すべき「中ロット品の生産」に特化し、安定した受注を獲得してきたことも大きい。大量生産は「ダイカスト鑄造」で、一品生産は「手込め」でというのが、業界の常識だが、それらを避けて、大物は「Vプロセス鑄造」で、高精度品は「金型(グラボティ)鑄造」することで、コスト面、納期面での優位を確実なものにしてきた。

更に、「鑄造」という立場から発注者へのアドバイスを繰り返して、設計図面の改良を通じて、顧客との一体関係を築き上げてきたことも無視できない。「技術を徹底して重視する姿勢」が今日の繁栄へとつながつたのである。

未来へのチャレンジ (循環型企業への挑戦)

当社は、この技術力を利用して、今復元瓦のミニチュアを製造している。材料は工事の際に発生した鉛屑材であり、ケース、装飾品等の付属品は異業種グループ「NUT」の交流により生まれた。更に、景観鑄物と称して「立体魚拓」も試作している。これらは余技の部類に属すると言えないこともないが高度技術を活用している点では、機械部品等と変わりはない。

「難しいことをやる」「難しいものを作る」という大方針が成功の原動力であったという経験を活かして、今後も挑戦を続け、鑄造業の宿命ともいえる公害型企業を脱し、リサイクル効率の極めて高い循環型企業へと転換を図っている。その手始めが、リサイクル材を利用したこのミニチュア瓦である。循環型社会の実現を目指す当社のチャレンジ精神を支援し、金沢城址復元を記念して、会員各位の家庭に一個ずつ留め置かれることを提案したい。

(お問い合わせ)
オカダ合金株式会社

〒九二九 一三二一
河北郡宇ノ気町宇気六番地
TEL 〇七六 二八三 四三三
FAX 〇七六 二八三 一五四四
URL <http://www.okadagokin.co.jp/>

このコーナーでは石川の「チャレンジ企業」を応援しています。取材を希望される方は最寄りの商工会をお訪ねください。